

社会倫理研究所NEWSLETTER

社会倫理研究所ニューズレター

第8号 | 2004年9月・10月

■CONTENTS | 記事 | 社倫研ニュース | 懇話会オンライン | 懇話会報告 | 【不定期連載】あんな本・こんな本 |

北京管見：The International Forum on Scientific Literacy, Beijing 2004に出席して

小林傳司 (社会倫理研究所所長)

7月27日から8月1日の間、北京の中国科学技術会堂で開催された、The International Forum on Scientific Literacy, Beijing 2004 (公民科学素質建設国際論場 北京2004) に出席した。このフォーラムのテーマはPublic Scientific Literacy: Theory and Practice (公民科学素質建設：理論と実践) であった。

北京到着

中国はまだ訪れたことのない国である。一度は行ってみたいと思っていたので、今回の招待には渡りに船とばかり、勇んで出かけた。北京国際空港に着くと迎えの人が来てくれるという手筈であった。もちろん、私は中国語が出来ない。北京空港自体は普通の国際空港と変わるところはなく、無事入国した。到着ロビーの入り口に、多数の人が迎えのプラカードを持って待っている。私も自分の名前が書かれたプラカードの類を探した。それらしいのがあった。それをもっている人物のところに近づき、「ニーハオ」である。服装は学生のようなカジュアルで地味なものであったが、年齢はどう見ても30代後半の長身の男である。髪型、服装からはどういう人物か読めない。彼はかすかににこりとすると、いきなり私の荷物を手にして、ずんずん歩き始める。大丈夫なのか。

すぐにわかったのであるが、彼は英語がまったく話せない。というより、理解できない。学生ではないのだろうか。いったい何者なのか？不安が募る。

空港の外の駐車場にたどり着いた。一応、私は招待講演者であり、自動車で迎えに来てくれている。これからどこに行くのかくらい教えてくれてもよさそうなのであるが、彼は無言である。そして、彼が指し示す自動車を見て驚いた。ボロい。もちろん、中国

の自動車事情についてはある程度知っていたので、黒塗りのベンツが来るなどとは思っていない。でもこれは何だ、動くのか、といった代物。しかも彼は、ドアを開ける前に、自動車の下側を覗き込んだりしている。私の荷物をトランクに入れたあと、助手席の雑然とした荷物を後部座席に放り込んで、乗れという身振りをする。中国では、タクシーでも助手席に乗ることがまだ普通なので、やはり、と思いつつ乗り込んだ。

案の定、エンジンが中々かからない。やっとかかったとき、初めて彼が言葉を発した。「トヨタ」といって、にっこりとする。そう、この車はトヨタのクラウンであった。しかし途方もなく古いクラウンである。30年位前のやつではないか。帰国後、調べてみたら、やはり私の記憶どおりで、1971年に登場の第四代目クラウン、スピンドルシェープ(紡錘状の形)を売り物にしたモデルであった。彼は、トヨタ・クラウンを示すことによって、日本人の私に安心感を与えようとしたのであろう。

それからは、会場兼ホテルまで高速道路のドライブとなった。高速道路を走る車の車線変更自由自在という世界は、十分な恐怖感を与えたが、彼とははじめは互いにほぼ沈黙状態ではあったが、私はなんとなく安心した気分になっていた。そのうち、道路わきの地名表示に英語表記があるのを手がかりに、私が発音してみせ、彼がそれを訂正するといった、即席中国語発音講座などをやりながら、無事会場に着いた。とは言え、最後まで、彼の名前も分からず、また何者かもわからなかった。フォーラムの日には、参加者として受付に来たりしていたので、おそらく、中国側の研究者かその予備軍であったようである。彼とはもうちょっと、何か話をしてみたかった。

フォーラム

このフォーラムは、中国科学技術協会（China Association for Science and Technology :CAST)が主催し、中国科学技術部（省に対応）、北京大学、清華大学、北京師範大学が共催で開催された。会場となった中国科学技術会堂は、CAST所有の会議施設で、宿泊施設も備えている。

招待講演者はアメリカからAAAS副ディレクターのG.Deber氏、San Jose大学教授Lui LAM氏、イギリスからBAASのRoland Jackson氏（家族の急病で欠席）、ロシアからロシア科学アカデミーのGoubarev Vladimir氏、フランスからPCST(International Public Understanding of Science Network)のPierre Fayerd氏、タイからTinnaluck Yuwanuch氏、韓国から韓国科学財団の趙淑京氏、西江大学教授の李徳煥氏であった。日本側からは、私以外に、毛利衛科学未来館館長、前田義幸JST企画課長、渡辺政隆科学技術政策研究所上席研究官、田中耕治京都大学教育学部教授、西岡加奈恵京都大学教育学部助教授の6名であった。中国側からは数十名の参加者（発表者を含む）があった。

会議はplenaryとround table sessionの二種類であり、私は後者で発表したが、plenaryにも出席を要請され、全日程、全セッションに参加し、討議に加わった。

本フォーラムは、主催者構成からもわかるように、中国政府の今後の科学技術政策と

密接に結びついたものであり、それに北京の有力大学が関与するというものであった。現在、中国は鄧小平以来の改革開放路線による、急速な経済発展の渦中にあるが、その発展の副産物として、学歴、性別、経済力、地域による大きな知的格差が生じている。特に、経済発展に必要とされる、科学技術系人材の育成と同時に、社会全体の近代化にとって必須の科学技術リテラシーの普及が課題となっている。都市エリアに比べると地方では義務教育の普及も実現しておらず、科学技術リテラシーの貧困さは多様な迷信の跋扈という問題を生んでいる。したがって、中国が抱えるこのような課題の解決を、国家政策としての「科学技術普及」という観点から試みるためのフォーラムというのが、今回の会議の位置づけであった。



中国側の発表は、基本的に、アメリカで開発された一般人の科学リテラシー測定テストを実施し、その成果を報告するとともに、その改善策を考えるというスタイルのものや中学、高校での理科教育の改善策といったものであった

また、インドやタイの報告では、科学の西洋起源に伴う性格が強調され、迷信の克服といった課題は後景に退き、むしろ、伝統的知識体系と西洋科学の接続を通じた一般人の科学リテラシーの向上という取り組みが紹介された。

アメリカの報告は、1989年に策定され、1993年にその内実を具体化した「プロジェクト2061」という計画の紹介であった。これは基本的に、すべてのアメリカ人が身につけるべき科学知識の基準を「ベンチマーク」と呼ばれる一群の科学的命題の設定によって定め、それを実行するための教育改善プログラムである。明らかに、科学知識の「中身」志向であり、科学リテラシーを知識量によって測定するという発想に立っている。

他方、韓国では、日本と同様、急速な人口減少が生じている中で理科離れが顕在化し、また知識量においても問題が生じているという認識のもと、科学の理念を強調することによる科学知識普及プログラムが紹介された。

日本側では、渡辺氏が日本における科学リテラシーの現状を、各種のアンケート調査の結果に基づいて紹介し（つまり、若者が科学への関心を失い、知識も貧困になっていること）、毛利氏と前田氏が科学未来館の取り組みやJSTの取り組みを紹介した。

私は、日本におけるpublic understanding of scienceの課題が歴史的に変化してきた事情を説明した。すなわち、1970年前後までは、高度経済成長路線のもと、人々の意識は科学推進を指示し、また科学技術に関心を持ち、その素養を身につけること自体が社会の幸福のみならず個人の将来の豊かさにもつながると理解されていた。しかし、1970年

頃、一定の豊かさを実現し、OECDのメンバーにもなった頃から、科学技術の負の側面が、公害事件などを通じて意識され始め、人々の科学に対する意識が大きく変容した。しかし、冷戦構造により、科学技術批判のような言説が、反体制的、革命主義的レトリックに彩られ、他方専門家、行政サイドもこれにイデオロギー的に反発するのみであったため、冷戦の終了するまで、不毛な対立構造が生まれ続けたことを指摘した。しかし、90年代になると、地球環境問題に象徴されるような、科学技術の不確実さとその中での意思決定の必要性とが認識されるようになり、専門家と一般市民の双方向性の対話やコミュニケーションの試みが開始されている。したがって、現代日本のような先進国においては、public understanding of scienceは、科学知識の啓蒙・普及活動だけでは不十分であり、豊かさを実現した社会に生きる人々の要求や主張に耳を傾け、それを科学技術のあり方に反映させるような仕組みの構築が必要になりつつあることを主張した。おそらく、中国では、日本の1960年以前のような社会情勢であり、この種の課題は現実感を持って感じられないであろう。しかし、遠からず、中国でもこのような課題が浮上するはずである。この点で、フランスのFayerd氏は国際的なpublic understanding of science活動に取り組んでいるだけあって、科学者による知識注入型の試みに批判的であり、科学者と一般の人々の間を媒介するサイエンス・コミュニケーターの必要性を強調していたが、私の議論と共鳴するところが多いと思われた。氏に対して、サイエンス・コミュニケーターに必要な資質は何だと思うかと質問したところ、彼は、一定の科学知識は必要であるが、何より重要なことは、double distantつまり、科学に対しても、一般の人々の感覚に対しても、距離をとる発想の出来ること、と答えた。これはなかなか重要な指摘だと思う。

雑感

以下では、この北京滞在中に感じたことを少し書いてみよう。

まず何よりも実感したことは、北京あるいは中国が巨大な経済発展のさなかにあることであった。一昔前なら、北京といえば、大量の自転車による通勤風景であったろう。今も自転車は大量に走っているが、それ以上に増加しているのが自動車である。新聞でも報道されているように、急速なモータリゼーションは経済発展の賜物であるが、同時に交通ルールの熟成が追いつかない。警笛の音は頻繁に聞こえるし、歩行者優先といった発想はまずないといってよい。渋滞しているときも、高速道路走行中も、少しでも前に出ようと割り込みや車線変更が繰り返される。自転車部隊のほうも中々のもので、平気で走行車線を逆走している。見ていてハラハラするくらいである。

その結果、町の大気汚染はかなりのものといえる。特に、公共交通機関のバスの排ガスはかなりひどい。車両がそもそも古すぎるのである。北京市の見晴らしのよい観光地から見ても、常に街全体が霞がかっている。その上、街全体が建設ラッシュに包まれて、活気づいている。

この活気は、日本の1960年代のそれと似ている。中国は2008年の北京オリンピック開

催、2010年の上海万博の開催を控えての、経済成長と都市改造の真っ最中なのである。街の大通りに面したところのビル群は、東京やロンドンなどと同じ近代的ビルが増えている。携帯電話を使い、BMWに乗り、ブランド物を身につけた人々もたくさんいる。ところが一步路地を入ると、光景は様変わりする。中国共産党外交委員会（共産党の外務省のようなものか）のビルは立派な近代的ビルである。その横の路地を入っていくと、狭く曲がりくねった道が続き、途中からは舗装もなくなる。そしてその道端には多数の露天商が店を開いている。野菜や果物、各種食材が売られており、道行く人の服装も変わる。ステテコ（もう死語かな）、ランニングシャツのおじさんたちがタバコを吸いながらうろうろしているのである。付近の市場に入ると、肉屋では骨のついた腿肉が丸ごとつるされており、客は部位を指定して、その場で切り捌いてもらうのである。およそ冷蔵装置のついたショーケースなど見当たらない。ハエが飛び回っている。魚屋の金盥には、何十匹もの生きた蛇が入れられている。どんな料理になるのであろうか。肉屋の片隅では、生きた鳩や鶏が檻に入っている。

繁華街でも、物乞いをする人々がかなりいる。北京でさえこういう状態である。しかし北京などの都市部と田舎の間には、もっと大きな格差が見られるという。経済的格差は言うまでもない。先に触れたように、そもそも、義務教育が完全には普及していないという。それが今回のフォーラムの開催の動機のひとつなのであった。他方、北京では小学校から英語教育が始まっているという。北京市の中流階級の場合、小学校時代というのは、ひたすら各種の習い事をする時期なのである。ピアノ、バレエなどの類である。そして、北京の主要大学の入学者は、ほとんどが北京市出身者で占められているという。

第2次世界大戦後の日本は、自民党長期政権において、ひたすら地方へ都市部の富を移転させるという政策を採ってきたように思える。この政策の功罪は相半ばするであろうが、少なくとも、今の中国に見られるような大きな格差が解消されてきたことだけは確かであろう。中国は、1960年以前の日本と、70年代、80年代、90年代、2000年代のすべての日本が同時並存しているような状況である。北京の中国人研究者と話すと、彼らは、鄧小平による改革開放路線がいかに大きな政策変更であり、それによって経済発展がどれほど進んできたかを強調する。確かにその通りであろう。そして、彼らは今の経済成長路線にほとんど何の疑問も抱いていない。これも当然であろう。かつての日本人もそうであった。しかし、中国の経済発展の時代は、公害だけでなく地球環境問題にも同時に対応しなければならない時代なのである。早晩、中国が豊かさを実現したとき、今の経済成長路線はどのように振り返られることになるのであろうか。

日本では、若者の理科離れを憂慮する声が盛んに聞こえる。確かに、アンケート調査でも科学技術に関心があると答える人々の数は減少し、高齢化している。これは、科学技術に関心を持った世代がそのまま高齢化していることを意味している。その世代とは、団塊の世代である。彼らが若かりし頃、日本は高度経済成長の真っ最中であった。科学技術による豊かな社会の実現、それも物質的豊かさの実現、は当時誰もが共有した

夢であった。しかし、一定の豊かさを実現したあと、次の世代はその夢にそれほどひきつけられなくなる。日本の現状はその結果である。中国の小学生は今、音楽やスポーツの習い事に精出しているという。彼らが大人になったとき、中国は豊かな社会になっているであろう。それでも彼らは、今のような経済成長路線に満足するであろうか。

10年もすれば、この答えは出るのであろう。日本とは異なり、地方と都市部の格差が依然として残るとすれば、都市部は別として、中国全体では、経済成長路線は支持され続けるかもしれない。少なくとも、今の中国では、英語が出来ること、あるいは科学技術の専門知識を身につけること、が高収入を保証しているのである。

今回、中国を訪れて目にしたこの活気は、私には懐かしくもあり、少々暑苦しくも感じた。日本には、貧しさからの脱却という発条を梃子に科学技術の開発に邁進した歴史がある。しかし、もはや、日本が現在の中国のような活気を回復することはない。豊かさと貧しさの落差という起電力を失った現在、科学技術は何を動機付けとしていくのであろうか。日本政府は、資源に乏しい日本の生きる未知は人材にあるとして、科学技術立国路線を推進しているが、今後の日本の科学技術は、デザインや美的洗練といった要素を組み込むといったことが動機付けにならざるをえないのかもしれない。漠然と、こんな感想を抱きながら、北京から帰国した。また、訪れてみたい国である。

社倫研ニュース

2004年8月、社倫研事務室、研究室、図書室が名古屋キャンパスN棟に移転しました。図書室が1階、事務室が2階、研究所員の部屋が3階にあります。

懇話会オンライン

今回は、富山大学経済学部経営法学科の秋葉悦子先生のご講演「**人格主義の生命倫理学とヒト胚の尊厳について**」をお届けいたします。

懇話会報告

去る7月2日(金)、南山大学J棟1階特別合同研究室にて、本年度第2回懇話会が開催されました。講師に椙山女学園大学現代マネジメント学部助教授の山田哲也先生をお招きして、「21世紀の国際社会と国連：武力行使を巡る問題を中心として」というタイトルでご講演いただきました。



山田先生はまず、冷戦期をはさんで、国連の集団的安全保障なるものがどのように変遷してきたのか、という事実の確認から話を始めました。冷戦の終焉、湾岸危機、世界各地での内戦、民族紛争をへて、「安全保障理事会の決議が採択されなかったからといって人権侵害や人道上の惨劇を放置しておいていいのか」という「人道的介入」の問題が深刻化してゆき、9.11後、安保理の決定によって国際社

会が行動するという構造が崩れてゆく様子が語られました。こうした現状認識に基づき、山田先生は、近未来的な国連の集団安全保障像について、(1)国連憲章の起草者たちが期待したような集団的安全保障システムは今後も実現しない、(2)PKOを通じた武力行使やPKOの形を使ったアドホックな集団的安全保障体制の復活はありえない、(3)多国籍軍や有志連合とPKOとの役割分担という現行の構造がしばらくは継続する、と述べます。

次に論点は、こうした状況の中で日本はどうすべきか、ということに移りました。山田先生は、日本として国連をどのように生かすのかを考える上で、まずもって「現実主義的」な国連観が必要であり(国連にご託宣を期待してはいけない)、そうした国連観を支える「現実主義的安全保障観」が必要である(日米安保か国連かではなく、日米安保も国連も6カ国協議も...とカードを増やすべきである)と主張します。また、法制面についても、PKO法の徹底した要請主義と異なり、テロ特措法とイラク特措法には「国際社会の取組に積極的かつ主体的に寄与する」という文言があることが指摘され、この「主体的」の中身について議論が必要である、と述べられました。さらに、「人間の安全保障」というキーワードを中心に自衛隊の海外での活動について再検討しなければならない、とも述べられました。そして最後に、21世紀の国際社会における日本の役割、国際社会における国連の役割を評価する上で日本にできること、について議論する上では、既存の日本のシステムを見直さなければ始まらない、と問題提起がなされました。



講演後の質疑応答では、模擬国連に関わる学生たちを始め、多くの出席者の方から、より具体的な中身に踏み込んだ質問が出され、活発な討議が行われました。(文責 | 奥田)

【不定期連載】

こんな本・あんな本 第7回

川内美彦 『ユニバーサル・デザイン バリアフリーへの問いかけ』学芸出版社、2001年

ロン・メイス21世紀デザインという賞をご存知だろうか。メイス氏はユニバーサル・デザインを提唱した米国の建築家だ。この賞の第一回の受賞作が本書である。著者の川内氏は、メイス氏をはじめとする関係者へのインタビューをとおして、ユニバーサル・デザインとは何かを探った。なぜバリアフリーからユニバーサル・デザインへの変換が必要なのかという問題意識が本書全体を通して見て取れる。

バリアフリーの例に駅の階段に設置された車椅子専用の移動装置がある。この仕組みは、車椅子を使用している川内氏にとって、障害を必要以上に強調しがちなものとして映る。というのは、この装置は車椅子の利用者のみが利用するもので、稼働中に周囲の視線を集めるからだ。バリアフリーは、社会を配慮が必要な人とそうでない人に分け、必要な人のために特別な仕組みを用意するという側面を持ってきた。

ユニバーサル・デザインには、はじめから社会の人々全員に使いやすいものを造ろうとする発想がある。配慮が必要な人とそうでない人を分けない。分けないことが、じつさいに全員にとって使い勝手のよいものになる。例えば駅に階段・エスカレーター・エレベーターをセットとして備え付ければ、車椅子の利用者、たまたま重い荷物を持っていた人や一時的に松葉杖をつく人、高齢者、そして健常者が自分で移動方法を選ぶことが可能だ。本書では、ユニバーサル・デザインという考え方のルーツがメイス氏らの証言によって明らかにされてゆく。このデザインを採用した例として、公衆電話・交通標識・野球場の椅子・建築物などの写真も多数並んでいる。

一級建築士である川内氏は設計について専門家であろう。しかし、ユニバーサル・デザインの普及のためには、消費者への教育だけでなく専門家への教育も重要であることをバランスよく解説している。専門家であるデザイナーは、製品の使い手に高齢者や障害者が含まれていることを意識し、利用者の多様性に気づくことが必要だ。受け手となる消費者には、製品の使い方だけでなく自分のニーズを把握することが求められる。

章立ては以下のとおり。ものづくりに携わる技術者だけでなく、すべての人に手にしていただきたい一冊である。

- 第1章 ユニバーサル・デザイン
- 第2章 ユニバーサル・デザインの性質
- 第3章 ユニバーサル・デザインに関わる言葉
- 第4章 ユニバーサル・デザインを実現するために
- 第5章 ロン・メイス

(第7回担当 | 杉原桂太)